

日本人と森林の心理的距離の探求
—哲学対話を通じた気づきと心理的变化の分析—

【 要 旨 】

ソーシャル・イノベーション研究科

ソーシャル・イノベーション専攻

2025年3月修了

橋本圭太

【要旨】

都市化により森林との地理的な距離が広がることで、日常的な接触機会が減少した。また、森林の多様な機能や役割に関する情報が十分に共有されていないことが、心理的距離を拡大させる要因となっている。さらに、近代化以降の経済優先の森林利用は、精神的価値よりも物質的価値を強調する風潮を助長し、心理的なつながりを弱めている。こうした要因が重なり合い、近年、都市住民と森林との心理的距離は一層広がりを見せている。

本研究では、人と森林の心理的距離に焦点を当て、その形成要因を明らかにし、心理的距離に「気づく」ことで、人と森林の関係性を再構築する方策を提案することを目的とする。では、人と森林の心理的距離を変えるにはどうすればよいただろうか。また、森林と自己との心理的関係を変えるきっかけ＝気づきを得るような働きかけはできるだろうか。

森林の中で「気づき」を得るための手法として哲学対話を活用した。この実践を通じて参加者が森林に対する認識や価値観を再構築し、自身が森林に抱く心理的距離を自覚・確認できるかについて検証した。この哲学対話は、個々の内面的変化を観察するだけでなく、社会的・文化的な変容を促進する新たな手法として意義を持つ。

哲学対話は、長野県伊那市の市民の森をフィールドとするワークショップを実践した。参加者は10代から60代までの多様な年代層の13名であり、対話の前後で事前・事後アンケートおよび対話の内容を音声データとして記録し質的分析を行った。アンケート分析と音声データ分析では、哲学対話の前後で森林に心理的距離を近づける回答や肯定する感情が増え、遠ざける感情は減ったことが確認された。これにより、哲学対話で森林との心理的距離を近づけ、参加者に居心地の良い空間として再認識させる効果を引き出すことが示唆された。一方で、森林との距離が近づかなかった例や、都市への親しみのほうが増した例も観察されている。これらの事例は、対話が必ずしも森林に「気づく」だけではなく、人々が都市と自然との関係を広範な視点から再構築する契機にもなり得ると考えられる。

今後は、本研究の成果を活かし、哲学対話の実践を通じて人と森林の心理的距離の理解を深めるプロジェクトを企画し、森林の理解を深める活動に繋げていく。